

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520354

研究課題名（和文）：華人の規範・アイデンティティと文化——〈家〉や在日の階層・文学・言説を焦点として

研究課題名（英文）：Ethnic Chinese norms, identity, and culture: Focus on the “home” and ethnic Chinese stratification, literature, and discourse in Japan

研究代表者：

桑島 道夫 (KUWAJIMA MICHIO)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：80293588

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本と東アジアの結節点となる可能性を秘めた華人のアイデンティティと文化を、教育・家庭の階層、そして在日華人日本語作家の文学等に焦点を当てながら究明した。国籍や出入国権の漸次的自由化に伴って東アジアを移動する華人の、容易には可視化しえないありようの一端を、明らかにすることができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study examined ethnic Chinese identity and culture, which have potential to become a node for Japan and East Asia, with focus on stratifications in education and the home as well as the literature of Japanese language authors of Chinese descent residing in Japan. It sheds a small amount of light on difficult to visualize aspects of the ethnic Chinese, who are moving increasingly throughout East Asia with the gradual liberalization of nationality and emigration/immigration rights.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

共同研究者3名は研究開始当初、いずれも静岡大学人文学部（平成24年度より人文社会科学部に改称）に所属し、研究対象を東アジア、とりわけ中国・台湾を焦点として歴史学・社会学・文学文化研究に専心従事してきた。「アジア研究」を次期中期目標・中期計画の重点課題とする本学では折しも平成21年6月、人文学部に「アジア研究センター」

が設置され、3名も研究員として所属することとなり、共同研究プロジェクトを始めたが、その発展形である本研究は、以下に挙げる本学の重点課題と密接に関わっている。

アジア研究——豊かな21世紀型中規模都市社会の構築を目指して

【研究のコンセプト】

欧米型社会とは異なる東アジアおよび東

南アジアの社会・文化・経済を主たる研究対象とし、環境・産業・社会・文化などの観点から、豊かな 21 世紀型中規模都市社会の構築のための包括的な理論的・政策的研究を組織的・重点的に行う。

【目標】

- ①アジアの社会・文化から 21 世紀型の中規模都市のあり方を研究する。
- ②わが国における豊かな中規模都市社会の創造に向けて政策提言（成果発信）を行う。
- ③アジアの連携のためのネットワークを形成する。

本共同研究が華人における家族という内の規範に注目したのは、上記「欧米型社会とは異なる」東アジアの或るエスニック・グループの原理を発見するためであった。また、とりわけ在日華人のアイデンティティに注目したのは、上記目標③を本研究の目的とするためであった。そのアイデンティティを明確化できたならば、当然上記①②の目標にも合致するはずである。

2. 研究の目的

(1) 華人の家族の実像や内的規範を押さえたうえで、特に在日華人の実態と意識を家庭の階層や文学・対日対中言説等の視点から分析し、そのアイデンティティを究明する。

(2) 最終的には、各分析を総合しつつ、ナショナリズムに裏打ちされた従来の「中国文化」を相対化し、トランス・ナショナルな「華人文化」の構築を図る。

中国語圏の人びとを理解しようとするとき我々は国家の厚い殻や国家間の高い政治的障壁に目を奪われがちであったが、本研究ではまず家族という私的領域、あるいは内的規範に焦点を当てた。それは中華経済圏の成立をも予感させるような昨今の東アジア情勢に対応する、アジア理解の深化をもたらすにちがいない。また、少子高齢化と人口減少が進む日本では、①東アジアという市場にいかにか受け入れられるか②東アジアから優秀な労働力をいかにスムーズに呼び込むか、が焦眉の問題となっているが、本研究では日本と東アジアの結節点となる可能性を秘めた在日華人のアイデンティティと文化を、家庭の階層や華人日本語作家の文学、およびそのコンテクストとしてある在日華人向け中国語新聞に見る対日・対中言説に焦点を当てながら究明しようとした。それはやはり東アジアの或る内的規範に迫る試みである。

3. 研究の方法

共同研究者 3 名は、基本的にそれぞれの学問分野から（在日）華人の家族の実態・意識を分析し、互いの知見を検討し合うなかで、問題設定の再検討や深化を図った。初年度にはまず基本的な資料（情報）収集と、分析の出発点となる理論・学説の確認を行い、暫時的なアウトライン・仮説を提出し、次年度以降さらに精緻化を図った。また、国内外の大学・機関の研究者とも頻りに連絡を取り合いながら、慎重かつ着実に研究を進めた。

次に、各研究者別に、研究方法および方法と密接に関わる問題意識を述べる。

(1) 中国語圏の近現代文学文化研究を専門とする桑島は、芥川賞作家楊逸等の文学テキストに見る在日華人のアイデンティティの揺らぎを、在日華人文学（古くは邱永漢——台湾出身の直木賞作家）や在米華人文学（たとえばエイミ・タン）の系譜と比較対照しながら分析した。

(2) 日本と台湾における家族的背景と社会階層との関わりについて、計量データを中心に分析してきた竹ノ下は、スモール・ビジネスの創始とその存続に家族がどのような役割を果たすのか、家族の影響の仕方という点で研究を行った。

(3) 中国近代史を専門とする戸部のこれまでの関心は、中華民国期に学校で提示された家庭教育論と当時の〈家〉での教育との間にどのような違いがあったのかということであった。東京華僑学校への注目は、近代的教育制度の成立期における公的領域と私的領域の境に中国の教育や社会の本質を見ようとする問題意識の延長線上にある。

最後に、本共同研究を統括する立場から研究方法・問題意識を述べる。

(1) トランス・ナショナルな視点

従来の華人研究では中国中心化に向かう引力がどうしても働いてきたが（台湾の華人研究にしてもその裏返しに過ぎないものが多い）、本研究の新しさは自国中心主義的な国民国家の歴史観——中国であれ台湾であれ日本であれ——を超えた視点にある。家族や在日華人に焦点を当てるのはそういう意図から発しているが、特に華人の移民性・移動性という視点の導入によって、近代に対抗するトランス・ナショナルな文化空間の構築を目指した。

(2) 華人の「文化」への注目

華人研究は外枠としての法制度や経済から帰結されたものがほとんどであり、本研究のように「文化」に注目する研究は皆無であった。複数のエスニシティの交わりに位置する在日華人の内面はいままであまり顧みられてこなかったが、その内面の検討は——上

記(1)の視点と重なるけれども——従来の「華文学」の政治性、あるいは中国中心化を問い直すことにつながる。

(3) 理論的概念の横断的な応用

エスニシティにおける「文化的アイデンティティ」を重視するスチュアート・ホールが述べるようにアイデンティティが表象の外部ではなく内部で構築される「生産物」だとすれば、中国系移民文学こそは、華人をめぐる文化的アイデンティティの内実を問い、再生成するテキストであると言えよう。そうした社会学的概念の応用は、〈近代文学〉の成立以来、国民精神の表現という意識に呪縛されてきた文学研究を新たな局面へと解き放つはずである。

4. 研究成果

まず、3年間の決算として刊行した研究成果報告書を中心に、分担者ごとに述べる。

(1) 桑島は、楊逸の作品を海外華人文学の脈絡のなかで読み解いた。たとえばその「天安門事件」の表象は在欧米華人作家と同様、作者が活動する国や言語圏の読者の期待に寄り添っている。その一方で、小説に表現された青春や自由は、中国近代詩のはかなき青春たる徐志摩の詩とつながる歴史性と普遍性を持ったものであった。また、祖国と移住先のはざまで自分の居場所を求めて悩むという移民小説の王道と言えるテーマにあって、楊逸文学に登場する華人たちは、祖国への強い帰属意識が顕著なそれまでの華僑とは対照的な、「新華僑」的なこだわりのなさ(たとえば民族教育を子の世代に押しつけない傾向)が特徴的である。

(2) 竹ノ下は、日本と韓国・台湾の自営業者における家族的背景(慣習)と労働市場を関連づけながら、それぞれの国情を反映するジェンダー上の構造的な不平等構造を明らかにした。たとえば、女性の結婚後の離職率の高さは日本に顕著である。

(3) 戸部は、戦前期東京における華僑教育の動向を、東京華僑学校を中心に追った。その結果、従来あまり詳しく知られていなかった来歴・組織構成・財政状況・教育内容・学生の動向などを明らかにすることができた。また、特に学校の組織構成や教育内容を当時の中国本土の状況と比較したことで、中国政府の東京華僑学校に対する影響の度合いを知ることができた。1930年代以降、東京華僑学校は、中国政府によって規定された教育方針にできるだけ沿うよう組織構成・教育内容を改良しようとしたが、日中関係の悪化などに起因する財政上の困難や、日本政府による教育への介入などにより、十分な成果を上げることができなかった。中国政府の東京華僑学校への影響は限定的であったと言える。

そのほか関連する活動として、平成23年6月30日には藤井省三東京大学大学院人文社会系研究科教授に、漱石、魯迅、村上春樹、ウォン・カーウァイヤ、東アジアの自画像とも言える阿Qを通して東アジア・アイデンティティの問題をご講演いただいた。藤井教授は日本と中国において国民国家の文化的アイデンティティをそれぞれに表現してきた作家・映画監督たちが、トランス・ナショナルな東アジアの底流で確かにつながっていることを明らかにした。そうしたアイデンティティは今後、在日華人作家が扱って立とうとする言説空間ともつながっている。

また、同年12月22日には荒牧草平九州大学大学院人間環境学研究院准教授に、家族的背景と教育達成(教育的不平等)の問題について理論的知見を提供していただいた。科研費最終年度に向けて、理論的な枠組みを再検討する良い機会となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文等](計22件)

① 桑島道夫、華文学として楊逸を読む、アジア研究、静岡大学人文社会科学部アジア研究センター、査読無、8号別冊(平成22-24年度科学研究費補助金(基盤(C))研究成果報告書)、2013、57-64

② Takenoshita, Hirohisa, Gender, disparity in self-employment in East Asia: Family and labour market, アジア研究、静岡大学人文社会科学部アジア研究センター、査読無、8号別冊(平成22-24年度科学研究費補助金(基盤(C))研究成果報告書)、2013、19-37

③ 戸部健、戦前期東京における華僑教育の動向について——東京華僑学校を中心に、アジア研究、静岡大学人文社会科学部アジア研究センター、査読無、8号別冊(平成22-24年度科学研究費補助金(基盤(C))研究成果報告書)、2013、3-17

④ Takenoshita, Hirohisa, "Family, Labour Market Structures, and the Dynamics of Self-Employment: Gender Differences in Self-Employment Entry in Japan, Korea and Taiwan," (under peer review) *Comparative Social Research* 29 (2012): 85-112.

- ⑤ 桑島道夫、關於李維英雄的中國表象、作家、作家雜誌社（中國）、查読無、8月号、2011、13-15
- ⑥ 桑島道夫、衛慧『ブッダと結婚』に見る国際結婚とセルフ・オリエンタリズム、『翻訳の文化／文化の翻訳』、静岡大学人文学部翻訳文化研究会、查読無、6号別冊（平成20-22年度科学研究費補助金（基盤(C)）研究成果報告書）、2011、61-66
- ⑦ 戸部健、平民教育と天津社会——中華民国北京政府期における「社会教育」の地域性、近代中国の地域像（山本英史編）、山川出版社、查読無、2011、87-121
- ⑧ 戸部健、1920年代後半～40年代天津における義務教育の進展とその背景、東洋史研究、查読有、69巻4号、2011、122-156

[学会発表] (計19件)

- ① 戸部健、中国の「失学者」にとっての日中戦争の意味——天津の事例から、辛亥革命100周年記念国際シンポジウム——アジア主義・近代ナショナリズムの再検討、2011年11月20日、於東京大学（東京）
- ② Takenoshita, Hirohisa, “The Labor Market Structure and Self-Employment in Three Asian Countries: A Comparative Study of Japan, Korea, and Taiwan” (paper presented at the annual meeting of American Sociological Association, Las Vegas, Nevada, USA, August 22, 2011).
- ③ 桑島道夫、關於李維英雄的中國表象、日中青年作家會議2010、2010年9月4日、於中国社会科学院（北京）
- ④ Takenoshita, Hirohisa, “Family, Labor Market Structure, and Dynamics of Self-Employment in Three Asian Countries: A Comparative Study of Japan, Korea and Taiwan” (paper presented at the World Congress of Sociology, Gothenburg, Sweden, July 12, 2010).

[図書] (計2件)

- ① Takenoshita, Hirohisa and Huynh Truong Huy, *Migration: Practices, Challenges and Impact*, Nova Science Publishers, 2013, 155-178.
- ② 桑島道夫編訳・解説、9人の隣人たちの声

——中国新鋭作家短編小説選、勉誠出版、2012、1-384

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑島道夫 (KUWAJIMA MICHIO)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：80293588

(2) 研究分担者

竹ノ下弘久 (TAKENOSHITA HIROHISA)
上智大学・総合人間科学部・准教授
研究者番号：10402231
戸部健 (TOBE KEN)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：20515407

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：